

皮膚疾患患者への清拭方法の検討

南4階病棟 発表者 輪 湖 栄 子

鈴木幸美・立石益子・向山靖子・村山博子
野村法子・中山和子・忠地千恵子・横水洋子
二木さと子・小池千鶴・丸山博子・北澤由子
小西栄美子

I はじめに

皮膚疾患患者を看護する上で軟膏処置は大きな部分を占める。軟膏処置の前には必ず清拭を行なっているが、皮膚病変があるため石けんを用いることもできず、流しっぱなしの湯でもみだしたタオルで清拭していたが、患者にとって十分に満足できるものではなかったように思う。

そこで、現在行なっている清拭方法以外に蒸しタオル清拭・熱布清拭の三通りを行ないそれぞれを観察し、患者にとって安楽で満足感が得られ、またより効果的な軟膏処置ができるように、処置前の清拭方法について検討したことをここに発表する。

II 実施方法

1. 蒸しタオル清拭・熱布清拭を実際に体験する。
2. 観察表を作成し、従来の清拭・蒸しタオル清拭・熱布清拭を実施する。(参考資料1・2参照)

III 研究期間

昭和55年6月22日～8月16日

IV 患者紹介

<症例1>

病名：皮膚細網症 61才 女性

現在の皮膚の状態：全身に扁平浸潤あり、額部・右乳房部・左鎖骨部・左腋窩部・背部に腫瘍を認め常に全身身痒痒あり、この為夜間不眠を訴えることもある。

治療：1日2回ステロイド軟膏塗布、ステロイド剤・抗腫瘍剤・抗ヒスタミン剤の内服。

軟膏塗布部位：全身

清潔：入浴不可

<症例2>

病名：紅皮症 59才 男性

現在の皮膚の状態：全身は暗紫色状態で除々に褪色しつつある。全身身痒痒あり、夜間不眠を訴えることもあ
る。両手掌足底肥厚している。

治療：1日2回ステロイド軟膏塗布。肥厚部ホウ酸亜鉛化軟膏貼布。抗ヒスタミン剤内服。

軟膏塗布部位：全身

清潔：入浴可

<症例3>

病名：菌状息肉症 67才 男性

現在の皮膚の状態：全身角化局面と色素沈着を呈している。痒痒は殆んどなし。

治 療：1日1回ステロイド軟膏塗布。

軟膏塗布部位：背部

清 潔：入浴不可

V 結 果

	①従来の清拭	②蒸しタオル清拭	③熱布清拭
プライバシー	タオルを頻回にもみだすために、カーテンの開閉が多く、外からみえてしまうことがある。	終始カーテンの中で清拭できるために、外からみえることがない。	
コミュニケーション	タオルを洗いに行かなければならないので、会話が途中でとぎれてしまうことがある。	常に患者のベッドサイドにすることができ、会話もちやすかった。	
清拭前後の掻痒の変化(図1参照)	清拭後、変化なしが多く、半分以上を占めている。	軽減することが多い。	軽減及び消失が多い。
タオルの平均温度(図2参照)	◦清拭前後の温度差は少ないが、中間の温度は、40℃前後であった。	清拭前後の温度差は、従来の清拭よりも大きい。中間の温度は、50℃前後であった。	◦清拭前後の温度差は、従来の清拭、蒸しタオル清拭に比べ少なく中間の温度は、38℃前後であった。
軟膏塗布量(図3参照)	◦熱布清拭・蒸しタオル清拭・従来の清拭の順に軟膏塗布量が少なくなっている。		

図 1

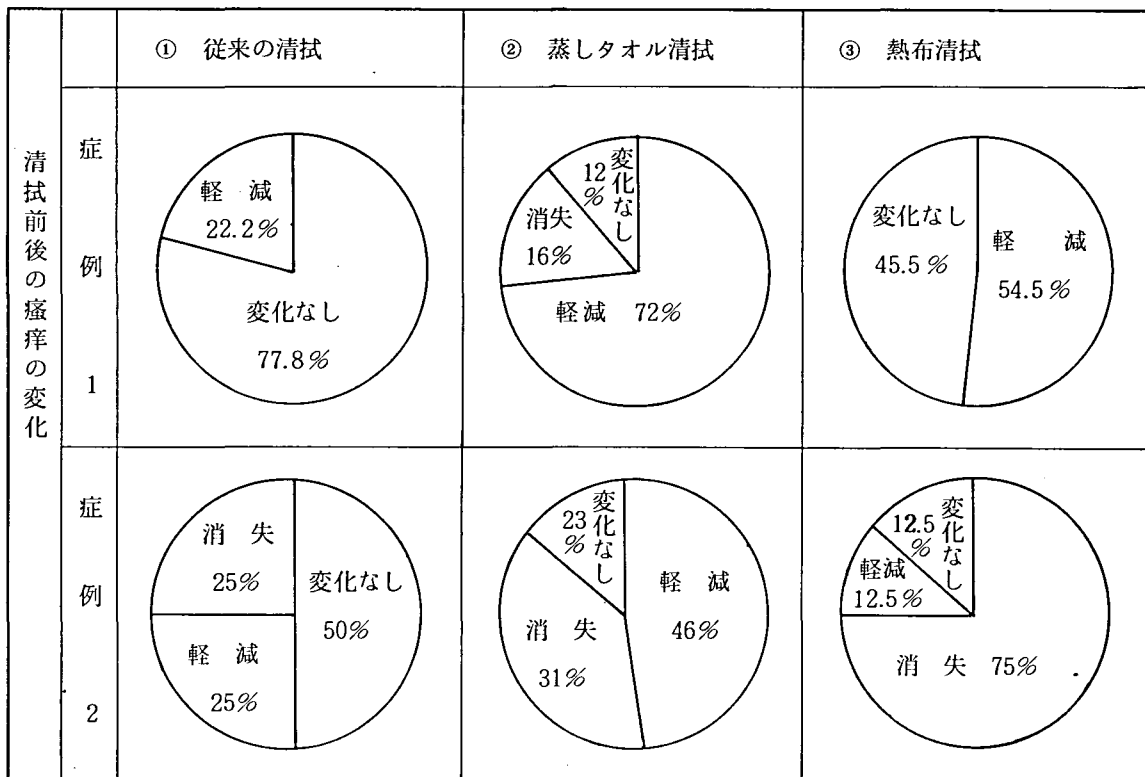


図2

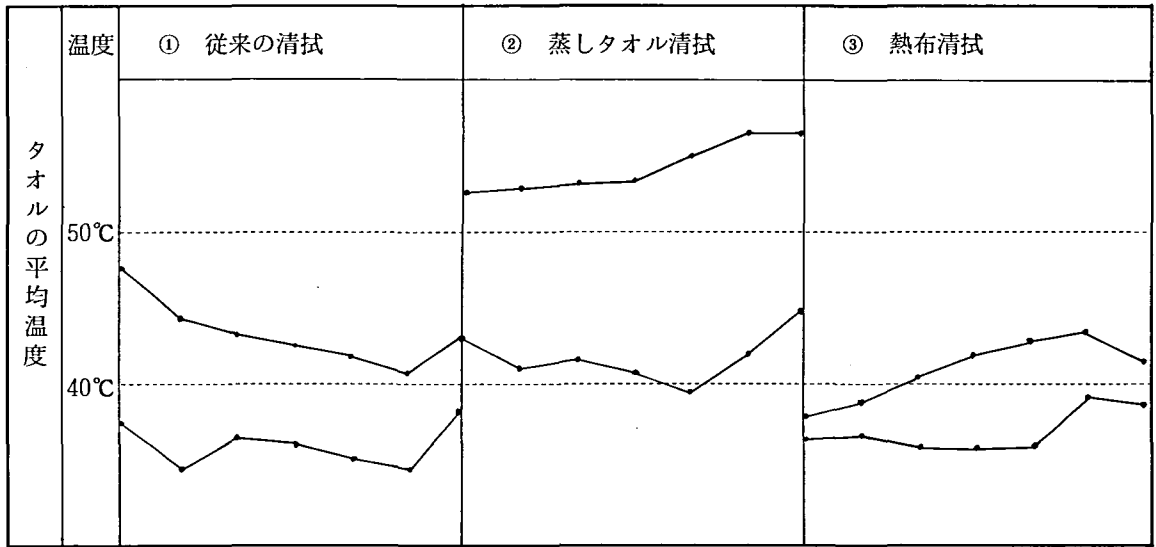
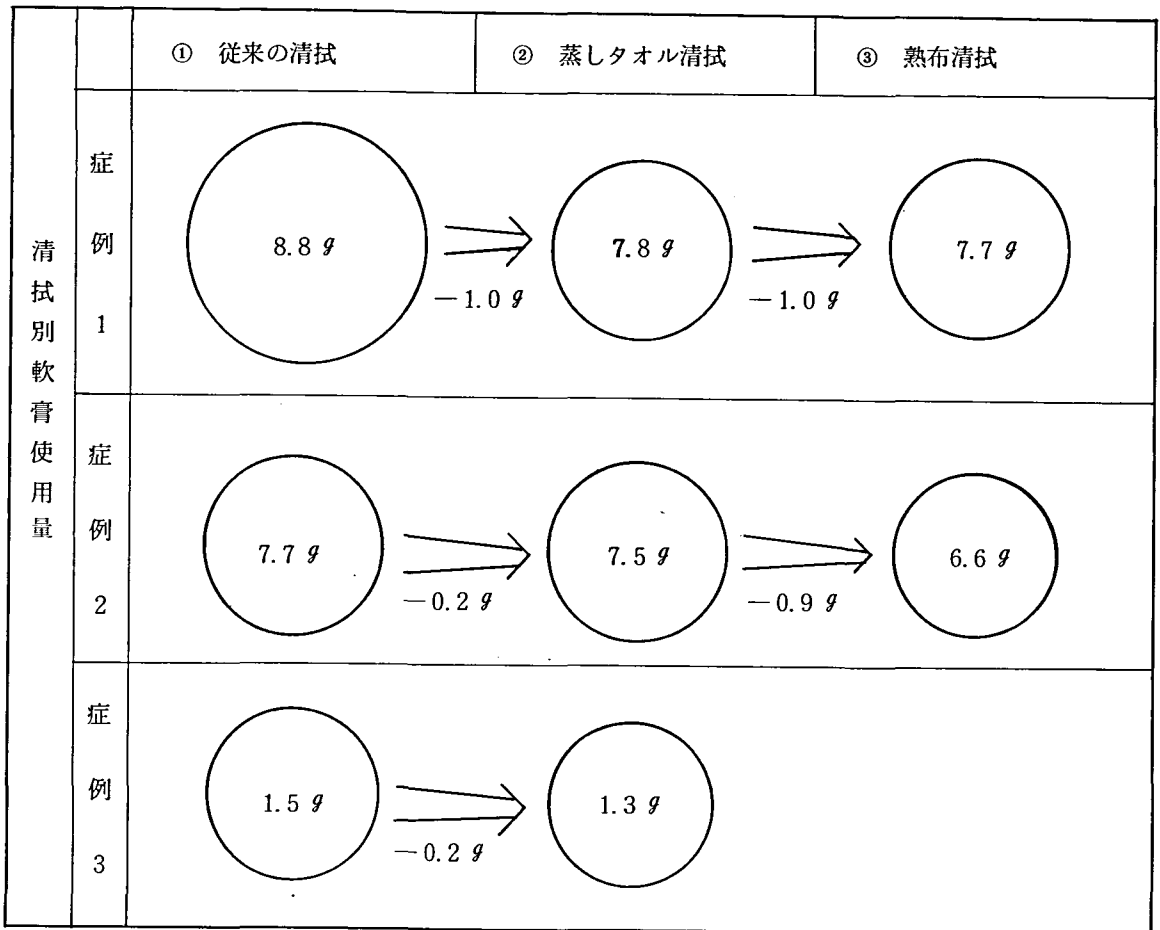


図3



VI 考 察

① 従来の清拭

タオルを頻回にもみだす為、カーテンの開閉が多く外から見えてしまいプライバシーが充分守れず会話がとぎれとぎれとなり、患者より「忙しそうで途中いなくなってしまうような、ほうりだされたような気がした。」と言われ、その場を離れることは不安を増し十分なコミュニケーションをもつことができなかつたように思う。またタオルの温度が低くさめやすいことから、看護者も手早に清拭しタオルをあてた瞬間「ちょうどよい。」(症例3) また早目に冷めてしまい「これはぬるい」(症例1)「体を拭いた後冷めたい。」(症例2) というような患者の言葉から単に拭いてもらったというもので、患者にとって実際に拭いてもらう時間よりも、看護者がすすぎに行ったり来たりしている時間が多く、その為、待たせてしまう結果となり、患者にとって満足した清拭でなかつたように思う。

② 蒸しタオル清拭

終始カーテンの中で清拭できる為、外からみえることなくプライバシーが守られ、常に患者のベッドサイドにすることができ、会話も途中でとぎれてしまうことなく、患者より「もっとそこにタオルをあてて。」「ここから拭いてほしい。」など、自然にコミュニケーションがもてたように思う。また従来よりもタオルの温度が熱目なことから「蒸しタオルの方が気持ちよい。」「もう少し熱くてもよい。」「熱い方が気持ちよい。」(症例1)「誠によい。」(症例2)「前のよりこの方がよい。」(症例3) という患者の言葉から、従来の清拭よりもタオルの温度が高く、患者にとって満足感が得られたように思う。さらに場所を離れないことから、むだな時間が少なくなった。

③ 熱布清拭

蒸しタオル清拭と同様に終始カーテンの中で清拭するため外からみえることもなくプライバシーが守られ、時々ナイロンの上より押さえることから、「ほのぼのとした感じだ。」「拭いた後からだかポカポカしている。」(症例1)「これが一番よい。」「15分ではもったいない。」とか、タオルをとろうとすると「まだまだもったいない」(症例2)「もう少しやりたい。」(症例1)の言葉から、従来の清拭・蒸しタオル清拭を行なうなかで、もっとも気持ちよい様子がうかがえ、満足感が得られたように思う。

①～③の清拭方法を通して、皮膚の温度と湿度を高くすればするほど薬物の透過量はよくなるということより考えても、皮膚によくなじみ効果的な軟膏塗布を行なう為には、従来の清拭よりも蒸しタオル清拭、さらに熱布清拭が効果的だと思う。しかし、施行時間外に準備及び後片づけに時間がかかり、使用物品も多いことからさらに検討する必要がある。

VII おわりに

清拭を行なって従来の清拭よりも蒸しタオル清拭、さらにそれよりも熱布清拭の方が患者にとって満足のいくものであり、軟膏療法からも効果的であった。今後、より多くの患者に、蒸しタオル清拭及び熱布清拭を実施し検討していきたい。

さらにこの研究を通して、日常行なわれているケアに対し、私達はとかく1つの方法に流されていることに気づき、毎日1つ1つのケアを患者中心に満足のゆくものであったか確かめつゝ、患者がより安楽に入院生活が過ごせるよう努力していきたい。

この研究に際して御指導、御協力して下さいました諸先生方に感謝します。

参考文献

看護学雑誌 1980年 2月号

第9回日本看護学会集録 国分あい子著 マルホ皮膚科セミナー放送内容集№7.

皮膚疾患患者の看護 西山茂夫著 医学書院

小皮膚科学 北村包彦・川村太郎共著 金原出版

参考資料 I

<清拭方法>

① 従来の清拭

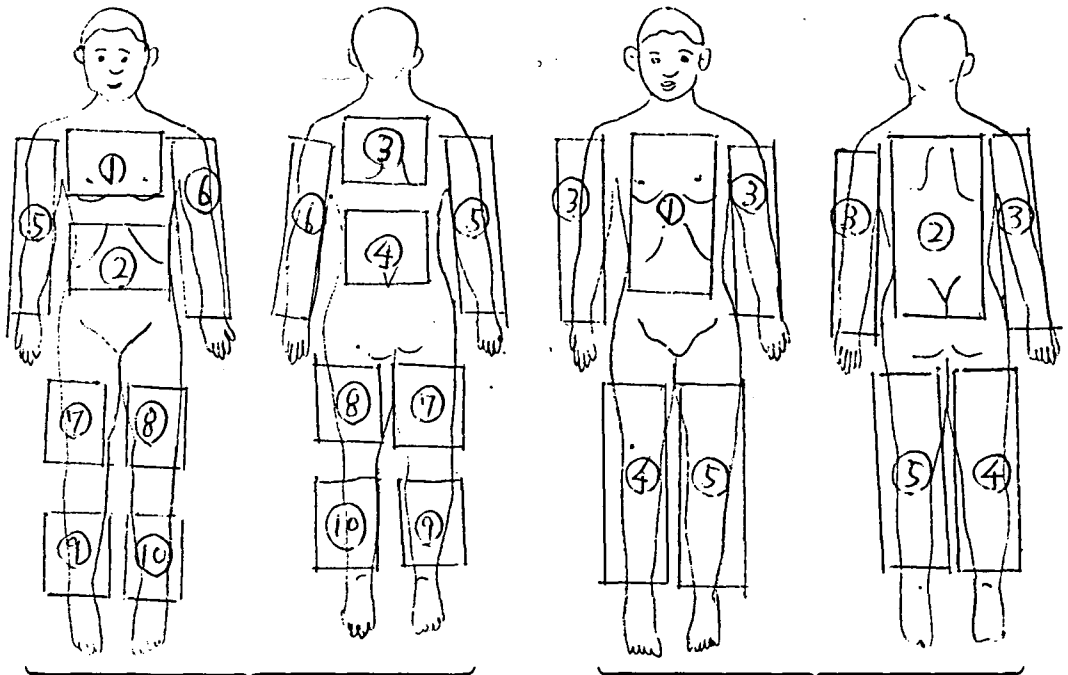
流しっぱなしのお湯でしぼったタオルで清拭する。範囲に応じてタオルをしばりなおす。最初のタオルだけ清拭前後の温度を測定する。

② 蒸しタオルによる清拭方法

蒸し器を使用する。蒸しタオルは看護者と患者の前腕内側にあてて適温にさます。2つ折りにしたタオルを皮膚にあて上から軽く押さえる。その後清拭する。タオルの枚数は清拭部位により異なる。全身の場合6～7枚を目安とする。最初のタオルだけ清拭前後の温度を測定する。

③ 熱布清拭

蒸し器を使用する。蒸しタオルを看護者と患者の前腕内側にあて適温にさまし皮膚にあて、その上に57℃前後にさましたバスタオルをあてる。乾いたバスタオルでその上をおおい、さらにその上をナイロンでおおう。施行中はタオルケットを用いて保温に心がけ温度計を胸部の皮膚とタオルの間にいれ、開始時と終了時の温度を測定する。時々ナイロンの上より軽く押さえ約15分施行したら一番下のタオルで清拭し、さらに乾いたタオルで湿気をとる。タオルのあて方は下の図を参照して下さい。以上3つの清拭後、軟膏塗布する際、計量スプーンを用いて軟膏量を測定する。



普通のタオルのあて方

バスタオルのあて方

熱布清拭時のタオルのあて方

症例 1		氏名										使用軟膏		リンデロンVG軟膏						
清拭方法	月 日	室温 湿度	開始時間 タオル温度	終了時間 タオル温度	掻痒の程度								軟膏 量	皮膚の状態	Ptの清拭に対する反応及び満足感	Nsの働きかけ及び感じたこと。	掻痒が増した場合の対策とその効果及び評価	その他	施行人数	施行者サイン
					清拭前				清拭後											
					なし	軽度	中等度	強度	なし	軽減	変化	増加								
従来の清拭	7/19	25℃ 75%	10:35 52℃	10:40 42℃		○							8.5g	全身発赤著明、腹部湿潤さみ。 ・52℃位で、ちょうどよい熱さのようだ。もみだしたばかりのタオルで清拭してもすぐさめてしまい「これは、ぬるい」と言う。	・タオルのさめるのが早い為、あまり気持ちよくないらしい。	・掻痒感変化なし		1名		
蒸しタオル清拭	8/2	26℃ 76%	8:05 53℃	8:12 49℃			○					○	7.7g	下腹部発赤強い。腰部、殿部皮膚乾燥さみ。 ・清拭している間、なかなかさめなくてよい。タオル全体が平均して暖かく裏返しても暖かい。	・背中、他の部分よりも少し熱目のタオルの方が気持ちよいらしい。清拭前に10秒程、背中や胸部にあてて軽くおさえると気持ちよいらしい。	・軽減		1名		
熱布清拭	8/10	28℃ 78%	14:40 40℃	15:00 38℃			○					○	7.6g	腰部、下腹部に発赤あり。皮膚乾燥している。 ・施行中は、とても気持ちよいらしくポカーンと口を開けている。従来の清拭、蒸しタオル清拭よりも、気持ちよくほのぼのとした感じがある。清拭中、手足のしびれ軽減する。	・1人で施行するよりも2人で施行すれば、患者を待たせることなくタオルを巻けると思う。軟膏ののびも他の清拭より比べれば、良いように思う。	・軽減以前より、夜間起きることが少なくなった。		2名		